

街はちようどお昼時。お目当ての店は結構混んでいて、少し待たされて、テーブルに案内された。

「おなかすいたよ。とりあえずランチだね」

「そうですね。ちようどいい時間ですし」

俺たちは、それぞれに食事を注文する。このシステムもさっきの教室と同じでアウトバンドでメニューが送られてくる。注文したい料理にタッチすれば注文完了だ。

「ねえ、何にする？ 私はこのレディスランチがいいかな」

「そうですね。軽いめのメニューですし。私もそれにします」

「僕は、そうだな、・・・スペシャルメニューで・・・」

「なんだよ、そのスペシャルってのは？」

「あはは、見てのお楽しみ」

「ジョージ、まさか、また？」

「おいおい、また謹慎食らうぞ」

「大丈夫だよ、ここは代金さえきちんと払えば文句は言わない。まあ、それで何かあっても自己責任だけだね」

どうやら、ジョージはこのカフェのシステムにも裏技を使えるらしい。

「ここのシステムは穴だらけ・・・でも、記録は残るから、ごまかしても後で請求が来る」

サムが口を開いたのは、これが最初か・・・。彼女もC&I志望だけあって、システムには詳しいのだろう。

「でも、その組み合わせは・・・デンジャラス」

「え、僕の注文わかったの？」

「調理ドロイドへの指令をインターセプトした」

「さすが、C&Iだねえ。ジョージの上前をはねるとは」

「まいったな。その手があったか。C&Iは情報のルーティングも制御できるからね。いわゆる、マン・イン・ザ・ミドルってやつだね」

「そう。ここの通信装置はセキュリティが甘い。偽の経路情報を受け取ってしまう。あ、正確にはガール・イン・ザ・ミドル」

「なにに、そのイン・ザ・ミドルってのは？」

「ああ、システム間の通信は、適切な経路を選んで伝送されるようになってるんだ。これを制御するために通信機器間で受け渡されるのがルーティング、つまり最適な通信経路の情報なんだけど、もし、偽物の経路情報を通信機器が受け入れてしまうと、本来の経路をねじ曲げることができるとだよ。たとえば、全部の通信が一旦、自分を経由するようにするとかね。そうすると、他の通信の中身を覗いたり書き換えたりすることができるとか。本来の通信相手の間に入り込むという意味で、イン・ザ・ミドルなのさ」

「それって、盗聴って言わないか？」

「まあね。でも、最低限のセキュリティすらかけていないこの店の方が悪いって話もある。それに、覗いたのがこのテーブルからの通信だけなら、問題ないだろうね。まあ、これがVUなんかでの一般の通信だったら、明らかに犯罪になってしまいうんだけど、VUの場合はかなり強固なセキュリティをかけてるから、僕にも破るのは無理だ」

いやはや、ジョージだけでも大変なのに、このサムって娘も、なかなか手強そうだな。ちなみに、VU（ヴィユー、バーチャルユニバースの略）ってのは昔風に言えばネットみたいなものだ。今では地上だけではなく、宇宙都市や各種の衛星をも繋いでいる。単なる情報だけではなく、インターフェイスを介した仮想現実感まで伝送できるので、たとえば、地上と宇宙都市の間での仮想会議みたいなこともできる。恒星間通信でも実験中だが、遅延がかなり大きいため、今の通信方法を変える必要があつて、まだ実用化はされていない。

「ところで、美月は何を注文したんだ？」

「関係ないでしょ！ 何でもいいじゃない」

「はいはい。でもまあ、来れば分かるんだし、隠しても無駄だろ」

「うるさいわね」

どうやら美月もちよつと大胆な注文をしたようだ。サムに聞いてみたい気もするが、敢えて火種を蒔かない方がよさそうだからやめておこう。

「ところでさ、C&Iは最初の一年、別課程で実習するじゃない。どんな実習してたの？」

「主に、情報処理能力に関する実習。とりわけ、多元的情報処理の訓練が中心。ある事象について、異なる視点からの情報を総合して、その事象の本質を推定、分析すること」

「ふーん、なんだか難しそうだねえ」

「たとえば、メデイカルが、いろんな症状から病名を推定するようなものですよね。それをもっと一般的な形にしたような」

「そう。抽象的な情報処理能力と同時に、出来るだけ多くの情報ソースとインターフェイス出来ることが、C&Iの条件。でも私は、あまり多くのインターフェイスを持っていない。情報は他人頼み。そういう意味では、C&Iとしては欠陥品」

「でもさ、C&I志望でいられるってことは、情報処理能力はかなり高いよね。さっきのだって、一応、暗号化されてる通信を解いたわけだから。だったら、船の情報系をうまく調整できれば、ある程度情報をたばねて渡すことは出来ると思うよ」

「あの暗号は古いタイプの物だから解読法はもう分かってる。ちよつと計算能力があれば解読できる」

「でも、あの短時間でそれをやったんだ。それはすごいと思う。僕だったら1時間くらいはかかるかもしれない」

ジョージは、このサムがちよつと気に入ったみたいだ。まあ、あくまでも彼のオタクセンサーが反応したのだとは思うが。

「ねえ、暗号ってそんなに簡単に解けるの？」

「いや、たぶんそれはこの二人だからじゃないか？ 少なくとも俺には何がなにやら分からん」

「たぶん今の最新型の暗号だと、アカデミーのセンターコンピュータを使っても何十年か、かかるんじゃないかな。それだけ時間がかかると、情報としての価値は、ほぼなくなってしまうから大丈夫だと思うよ」

「正確には75年と231日12時間3分35秒かかる。但し、センターコンピュータの量子演算ユニットを、そのためだけに全部使つての話だから非現実的」

「それを聞いてちよつと安心しました。メデイカルはプライバシーに関わる情報が多いですから、漏れたら大変なんですよね」

「そう単純じゃないわよ。暗号化する時って、それを解くための鍵になるデータを使うんですよ。その鍵が盗まれたら、どんな強力な暗号だって、あつという間に解かれてしまうのよ。だから、理論的な解読時間はあくまでも暗号鍵が盗まれないという前提よ」

と美月が横から口を挟む。これはちよつと意外。まあ、彼女も優等生のたぐいではあるわけだが、知識の範囲もかなり広そうだ。

「そうそう。そうなんだよね。だから、暗号化されたデータを力づくで解読するなんてこと

は普通やらないんだ。鍵が保管されているシステムに侵入してそれを盗むつてのが、大方の犯罪者の手口なんだよね」

「さすが、センターコンピュータをハッキングした人は言うことが違うねえ」

「だから、それは言いっこなしだつて」

「まあ、暗号鍵自体も、保存するときとは別の暗号を使って暗号化してあるから、それほど単純にはいかないけどね。ただデータ本体に比べれば、解読のための計算量は少なくすむから、どのみち鍵を手に入れるのが早道なんだよね」

なんとなく怪しい会話になってきている気がするのは俺だけだろうか。公共の場でこんな話をしていて大丈夫だろうか、などとちょっと心配になってきた時、ウエイトレスが料理を運んできた。ウエイトレスとは言っても、アンドロイド、つまり人型のロボットなのだが、これがまた、人と区別がつかないくらいよく出来ている。

「お待たせしました。レディスランチでございます」

「あ、それは私とそちらで」

とケイ。

「あ、お先にどうぞ」

「じゃ、お言葉に甘えていただきます」

「それじゃ私も、いただきます」

間もなく次々と料理が運ばれてきた。

「ハンバーガーランチでございます」

「あ、それは俺です」

「サラダランチでございます」

「それは私・・・」

さて、問題の二人は何を頼んだんだろう。最後になるってことは、手にかかる料理に違いはない。俺は自分の料理を食べながらも興味津々で2人の料理が運ばれてくるのを待っている。

「お待たせしました。14オンスのクラシックステーキでございます」

「それはこっち」

と美月。おいおい、真つ昼間から特大ステーキかよ。どんだけ肉好きなんだ、こいつは。

「おお、すごいねえ。美月って肉食派だったのかあ」

「悪い？ このところ肉とはご無沙汰してたから食べたかったのよ。まあ、地球で食べてた肉に比べたら安物だけど」

「ケンジ、喰われないように気をつけなよ」

「誰がケンジなんか。そんなもん食べたら腹壊すっての」

「そんなもん？ 喰いたいと言われても、こつちが願い下げだ！」

「ほらほら、痴話喧嘩しないの」

「痴話喧嘩？」

俺と美月が同時に・・・不覚にもかぶってしまった。

「お、やっぱ仲いいねえ。きつちり反応がかぶってるし」

「そ、そんなんじや・・・」

まただ・・・。

「ほらほら。二回連続つてのは、偶然にしても、かなり確率低いと思うよ」

そして今度は二人とも黙り込む。これもかぶってる。こいつとそこまで気が合うなんて、あまり考えたくないのだが、たぶん向こうもそう思っ様子を見ているのだろう。しばし、沈黙が・・・。その時、最後の料理が運ばれてきた。

「け、ケーキかよ」

そう。スペシャルメニューは、大皿いっぱいに乗せられたショートケーキ。そして、大ジョッキにつがれた黒い泡立つ液体。

「ねえ、その不気味な飲み物は何？」

「あ、これね。大昔流行ったコーラってやつ。一度飲んで見たかったんだよね。データベースからレシピを持ってきて、調理ドロイドに流してみたんだけど」

「おい、大丈夫か、そんな物飲んで・・・。しかも、飯の代わりにケーキって・・・」

「いやあ、なんか甘い物が食べたくてね。あ、たぶん一人じゃ食べきれないから、デザー
ト代わりに食べていいよ」

「デンジャラス・・・」

たしかに。この砂糖の塊みたいなケーキと不気味な液体、いやこれも甘そうだ。いくらなん
でも、炭水化物の摂り過ぎだろう。俺もサムの意見には同意する。

「でも、おいしそう」

とサム。

「あ、いいよ好きなの食べて」

「じゃ、私はイチゴのいただきっ！」

と、ケイが先に手を出す。案外、ジョージは女子受けする行動を無意識に会得しているのか
もしれない。結局、マリナと美月も一切れずつ。

「そりゃそうとき、さっきの話だけ・・・」

口にケーキを入れたまま、ジョージが言う。

「ジョージ君、お行儀悪いよ。食べてからにしなさいよ」

と言ってるケイも同じなのだが・・・。ジョージは口の中のケーキを、そのコーラとかいう
不気味な液体で流し込んでから続ける。

「TS5型飛ばした話が聞きたいなあ。あの機種 of 制御システムは最新型なんだよね。フラ
イトコンピュータだけじゃなくて、各部の制御用コンピュータが独立して自律的に動けるんだ。
ちようど人間の神経系みたいに、フライトコンピュータやパイロットの指示を、それぞれの部
分が学習するんだよ。それだけじゃなくて、フライトコンピュータなしで、互いにうまくバラ
ンスが取れるように協調して動けるんだ。だから、フライトコンピュータの負荷が大幅に軽減
された分、いろんな機能が増えてるらしいんだよね。旧システムに慣れたパイロットだと、最
初は違和感があるみたいんだけど、どんな感じだった？」

「いや、違和感もなにも、操縦したのは初めてだしな。でも、たしかにマニュアル操縦も思

ったほど難しくなかった気がする」

「え、マニュアルって、本当にマニュアルで飛ばしたの？」

「いや、俺も出来るとは思わなかった。シミュレータでやったときは5分でアウトだったんだけど、不思議だよ」

「ケンジ、あんた、誰かを忘れてないかしら？」

いきなり美月が割り込んできた。

「あんたが一人で操縦してみたみたいな言い方しないで欲しいわね」

「あ、いやそんなつもりじゃ・・・」

「そもそも、あんたは私のバックアップじゃない。まあ、私一人でも出来たとまでは言わないけど、忘れてもらっちゃ困るわ」

いかん、美月が黙っているのをいいことに、ちよつと調子に乗って喋ったのが、ご機嫌を損ねたようだ。でもまあ、美月が言うのにも一理はある。彼女のインターフェイスからの情報がなければ、俺一人ではダメだったかもしれない。それに、彼女のダイレクトインターフェイス（DI）ユニットが保護回路を強化した高級品じゃなければ、二人とも磁気嵐のショックによるオーバードロードで死んでいたかもしれないのだから。

「忘れてなんかいないさ。あれは、美月がいたから乗り越えられたんだしな。感謝してるんだ」

と俺はちよつとフォローに走ることにした。

「そ、そうよ！ 感謝しなさい。私だって・・・あんたがいなかったらダメだったかもしれない。そういう意味じゃ、感謝してるんだからね」

「おお、なんかいい感じですね。ケイさん的にはちよつと妬けますが」

「そう言えば、フランク先生が、お二人は相性が抜群、とかおっしゃってましたよね。羨ましいです」

「い、誤解しないでよね。別に、私はこいつなんか・・・」

美月が赤面して口ごもる。相性というのは、そういう意味とは違うと思うのだけど。

「相性って、そういう意味じゃなくて、なぜだか分からないんだけど、情報共有がすごくう

まくいくんだよな」

「そ、そうよ。情報共有の話だから。でも、確かに不思議なのよね。ケンジが相手だと、うちの親が私にやった人体実験みたいなインターフェイスからの情報がきれいに整理されるのよ」

「それは、興味深い」

「うん、なんだろう。僕もちよつと興味があるな。そうだ、ちよつと試しに遊んでみないか？」

「遊ぶって、どうするの？」

「ゲームセンターに行つてフライトシミュレータで遊ぶ。あれ、実はアカデミーのデータベースから一部のデータをもらってるから、リアルに近い操縦ができるんだよ。ちよつとこのチームで試しにやってみないか？」

「お、いいね。実習前の予行演習か。やろうやろう」

「面白そうですね。是非」

「あんたたち、知らないわよ。目が回っても・・・、私の情報量はハンパじゃないんだからね」

「そうだな、まあ、実習でいきなりやるよりは、一度練習しといたほうがいいかもしれない。やってみようか」

そんな感じで話がまとまって、俺たちは、近くにあるゲームセンターに向かったのである。